いわかがみ

令和七年六月　第百壱号

◇ 村の景観と歴史・人物（20）
◇ 民具が語る生活史（民具㉗ヘギ）
◇ 方言一考（ちょちょらにする）
◇ モノいうもの（地形から見る大蛇伝説）
◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物（20）

峠を越えた人たち⑪

最後の上関城主

三潴左近大夫長能（みずまさこんのたいふながよし）

渡辺伸栄

左近大夫という武官名は、略称して左近助とか左近とされる。本稿では、左近助と書く。

左近助、再雇用で上関城主に

上杉謙信没後の後継争い「御館の乱」で、景虎側についた上関城主・三潴出羽守政長は、景勝の勝利によって失脚。その子・左近助は、乱勃発の十二年前から謙信の命で庄厳城（旧朝日村）の守備に就いていたが、景勝に、父子共解雇され浪人になった。

乱から五年後の天正十一（一五八三）年、村上城主・本庄繁長のとりなしによって景勝は左近助だけを許し、父の居城であった上関城を与えた。とはいえ、父の所領はほとんど戻らず、百八十石余の、戦国武将としては極少禄の再雇用だった。（以上の経緯は、「いわかがみ第82号」の本連載一回目で紹介）

越後から出羽に転勤

慶長三（一五九八）年、左近助の主君・上杉景勝は、会津へ国替えとなった。その領地は、会津、福島、米沢、庄内、佐渡と広大。豊臣政権の五大老となった景勝は、大出世だった。

では、上関城主・三潴左近助はどうなったか。

江戸時代に作られた三潴家系書には、左近助は米沢小国城代を命ぜられ四百石、とある。十三峠を越えて上関から小国に転勤、俸禄は倍増、めでたしめでたしということになる。

以後、三潴家は米沢の上杉家臣として幕末を迎え、今日までその家を継いでいる。なお、現在の三潴家は「みつま」と称しているが、中世の文書では、三潴はよく水間とも書かれる。「みずま」と発音されていたのだろう。

三潴氏の発祥の地とされる福岡県旧三潴町は「みづま」と読む。水郷地帯で、水間や水沼が地名のもととされている。

転勤先の小国城は、どこ？

ところで、二〇一六年五月十日付新潟日報に、郷土史家花ケ前盛明さんの連載「越後史跡紀行69」で上関城址が紹介された。そこでは、左近助の転勤先は、山形県鶴岡市の小国城となっている。

実は、この記事の前に、花ケ前さんは歴史館を訪れている。当時の渡辺館長さんから、現地案内や説明を頼まれ、小国城のことも話した。その後、原稿の事前確認も依頼されたのだが、あえて訂正せずそのままにしておいた。中世の郷土史に関しては正否を論争するほどの根拠はなく、様々な推測がありうる。

「関川村史」は、会津移封後の左近助は出羽置賜郡高畠城の春日元忠の同心とされ、その後小国城代になったとある。同心とは配下の意味であり、小国城も置賜郡内ということになるだろう。三潴家系書も米沢小国城代で、庄内小国城代ではない。

少しややこしい話になるが、渡辺三省著「本庄氏と色部氏」では 文禄三（一五九四）年の史料をもとに、三潴氏は、出羽国庄内にいた本庄繁長の同心で、庄内にいたとしている。

このことがあって、花ケ前さんは庄内小国城としたようだ。村上と鶴岡を結ぶ出羽街道に小国城址がある。温海温泉から小国川をさかのぼった山

の中の旧街道集落である。

「関川村史」は、同じ文禄三年の記録で、庄内にいた本庄繁長の同心は、三潴家の分家・佐左衛門だとしている。

いずれにしても、庄内の話は、会津移封の前のことである。天正十六(一五八八)年に、景勝の命で繁長が庄内地方を攻め取り、会津移封後も景勝の領地として残った。本家没落後、佐左衛門は、庄内の繁長の下に身を寄せていたことになる。

米沢の置賜地方は、移封後、景勝の領地となった地で、そこへ、再興した三潴本家の左近助が転勤したということになるだろう。

花ケ前盛明さん一行の現地調査(上関城址)

三潴佐左衛門の甲冑

三潴氏は、本当に上関城主だったのか

なにせ、中世の郷土史は曖昧模糊とした部分が多い。裏付けとなる文書史料が少ないからである。「だろう」が、いつのまにか「だ」になったりしている。

そもそも、三潴氏が本当に上関城主だったのかというと、それすら、肝心の事実を示す文書史料は、まだ見つかっていない。

三潴家系書には、左近助の祖父と父が「下越後荒川城に居住」とあり、左近助が景勝に再雇用された際の文書には「荒川条、これを遣わすべきものなり」とあって「条」は「城」の当て字だろうと言われている。

「関川村史」は、この三代居城の荒川城は上関城だと自明のことのように書いているが、荒川という地名はどこにでもあって、下越地方にも複数箇所ある。小林弘さんは、三潴出羽守政長の所領と屋敷が新発田市中目にあったと古文書に残っていることから、この荒川城は新発田市荒川の城のことでは、と疑っている。

もしそうなら、我が村の歴史は大変なことになる。それで、私は、必死?になって、上関城である証拠を探している。

さて、証拠は見つかるか?

現在のところ、見つけた最も古い記録は、昭和三年の池上剛他郎編「自然及文化上から観たる岩船郡」という本で、次のように書いてあった。(国会図書館電子データ)

「関組の上関に水間右近、下関に下尾伊賀守、内須川に内須川左門(以上今の関谷村)、小見組に垂水左衛門(女川村)」

岩船郡内の戦国時代上杉配下の武将をあげた箇所である。ここに出てくる右近が左近助のことかどうか分からない。昔の歴史書は出典や元史料を書かない。そのため、確かめようがない。

それでも、昭和三年の時点で、三潴(水間)氏が上関城主だったとみなされていたことは分かった。

「関川村史」には、鎌倉幕府が三潴左衛門尉を桂関の関吏に任命したのが、上関城主三潴氏の始まりだと書いてある。しかし、「と伝えられている」とあって、どこにどう伝わったものか、何も書いていない。

もしかしたら江戸時代に書かれた「越後野志」という書物にはあるかと探したが、そのような記述箇所は見当たらない。

というふうに、まだまだ曖昧模糊ながら、いつかどこかで新しい情報に出逢えることを期待して、

次回から「上関城主三潴氏の謎」を書き綴る。引き続いてのご愛読を。

民具が語る生活史 ㉗ヘギ

春のお彼岸に、涅槃会(ねはんえ)の団子を作るお手伝いをしました。涅槃会は「お釈迦様」・「団子まき」とも呼ばれ、お釈迦さまが亡くなられたとされる2月15日、もしくは月遅れの3月15日に主に仏教寺院で行われる法要です。このとき団子をお供えし、それをまく習俗は、北信越地方に多く見られます。福井県の友人の地域では「団子はお釈迦様の舎利(骨)が五色に輝いたことに由来する」と伝わっているようです。

土沢の雲泉寺では団子は米粉で作り、白・ピンク・黄・緑の四色です。涅槃会の法要後に団子や菓子がまかれ、参加者は一生懸命拾います。かつては大勢の人が参加し、競い合って団子や菓子を拾うものでした。おばあさん方が座布団に座って袋を広げ、「おらにもくたしぇ」と役員の方へ声をかけるものの、「んだこど言わのの自分で拾わしぇ」と返され、笑いが起きた光景を覚えています。子供心に楽しい行事でした。

関川村では上関の正満寺や沢の円覚寺で団子まきが行われていたと記録にあります。また、この日に百万遍を集落で行い、その集まりで団子まきを行っていたところもあったそうです。このように、外来の宗教だった仏教は長い年月の中で日本の社会に浸透し、民俗化している行事が多くあります。

今回の団子作りに向けて、団子を並べて乾かす容れ物を準備しました。容れ物は縦35.4cm×横91cm×高さ11.2cmの杉材で、いわゆる「ヘギ」です。(写真参照)ただ、住職は「法衣盆(ほいぼん)」(法衣(ほうい・ほうえ)の容れ物)と呼びます。

「ヘギ」といえば「へぎそば」が有名です。いまでは新潟県を代表する食文化になりましたが、織物文化が盛んだった魚沼地方が発祥とされています。織物の緯糸(よこいと)を張るために布海苔(ふのり)が使われており、それをそばのつなぎに転用したことが布海苔そばの由来とされています。この布海苔そばを載せて提供する容れ物が「ヘギ」でしたが、いつしか布海苔そば＝ヘギそばとなりました。「ヘギ」はへぎ板で作った四角い器のことで、「剥ぐ＝はぐ＝へぐ」のなまりで、「剥ぎ」を語源とするようです。養蚕の場で使われていたものにそばを載せて出した、とも伝わるそうです。

へぎ板とは、スギやヒノキ、サワラなどの針葉樹の木材を、繊維を壊さないように手作業で割って作る板です。繊維を活かしているため、へぎ板には艶があり、水をはじきます。渡邉邸の屋根や当館の屋根に使われている木羽(こば)がまさにへぎ板です。

雲泉寺のへぎもしくは法衣盆は、寛政(1789―1801)と墨書されています。いまから220～230年前にときの住職が誂えたようです。

団子まきがいつから行われていたかはわかりませんが、へぎそばのへぎが織物文化に縁があり布海苔とともに転用されたように、雲泉寺のへぎも本来は法衣盆として作られ、いつからか団子用へぎに転用されたものかもしれません。水切れがよく、通気性に優れており軽量です。大事に引き継がれてきたものなのでしょう。

お釈迦様の団子は「いただくと風邪をひかない」、「食べないでお守りにする」などと言われ、「(ご)利益を)家族やお友達にわける」という方もおられます。十日町市の友人は「マムシ除けになるので携帯する人が多い」と言います。なんとも万能の効用です。

行事の起源や由来を突き止めるのは難しいですが、体調管理の大切さに気を引き締め、家族や友人の健康を願うのは普遍的なことと思います。すでに暑い日が続いています。どうぞご自愛下さい。　(神田舞子)

参考文献 佐久間惇一編1986「(8)お釈迦様」『関川郷の民俗』関川村教育委員会、農林水産省ウェブページ「うちの郷土料理　新潟県「へぎそば」」

←ヘギに並べられた団子

方言一考・ちょちょらにする

「ちょちょらにする」は「適当、いい加減」の悪い方の意味で「物事をちゃんとやらず、半端で適当、いい加減にするという意味だ。「ちょこらまっこ」というのも同じ意味で、おそらく「ちょっと」「ちょこっと」の「少し」の意味から派生した方言のように思われる。ちょっと手を付けて半端で止めて、最後までやらず、体裁だけ繕う、そんな意味合いだろうか。

雪が消えるのを待ち切れず百薬園の整備を始めたK氏、その努力で今年は一層見事な花壇になって見物客の絶えない様子を、私はマラソンの看板を立てながら離れて見ていた。熊よけのためだという、花園に似合わない演歌を腰に付けたラジオから大音響で流して草取りに余念無い様子の彼に、恐る恐る話しかける者があると大抵長話になる。花を見るより長く彼に付き合うことになるようだ。花の世話は厭きもせず何年もやっている彼だけれど、他も同様というわけではなくて、聞く限り「ちょちょらにして」人生を過ごしてきたふうだ。性格がちょちょらだからやることがちょちょらになるのは仕方ない。ちょちょらながらもその時その時を彼なりに生きて、ようやく喜寿を過ぎて一所懸命になれるものに出会えた。そんな一途なちょちょらさが咲かせた花かと思うと、梅雨空に映えてまた一段と美しい(安久)

モノ言うもの・地形から見る大蛇伝説

関川村の地形模型を荒川を中心に撮った写真です。右奥が杁差岳、左上に光兎山、中心に荒川が流れ、右から鍬江沢川、大石川、沼川、左から女川が荒川本流に注ぎ、それが一つとなって手前の高坪山と朴坂山との狭い谷間「貝附の狭戸(せばと)」を通って平野に出、海に流れ込みます。大蛇に化身したおりのは大里峠からこの光景を見下ろし、この狭戸を堰止めれば川の水は出る所が無くなり、関川全体が水の中に沈むと考えました。大蛇の伝説の舞台は実在する地名と地形を巧みに取り入れて現実味があります。この狭戸が土砂崩れで堰き止められるという危機感が物語に臨場感と切迫感を与え、洪水への警鐘ともなっているようです。(安久)

歴史館行事の報告

○春の健康登山「角田山」 4月5日(土) 参加者・スタッフ23名

○登録文化財「平田大六家住宅」見学会 5月15日(木) 参加者11名

○山城を訪ねて・三条市高城城址→ 5月24日(土) 参加者・スタッフ23名

○夏の健康登山「西吾妻山」 6月28日(土) 参加者・スタッフ29名

○古文書解読講座(4～6月) 明治初期の文書を読みました！いまは村の方から寄贈された文書を読んでいます。

お知らせ

○山城を訪ねて・岩室天神山城址の日程変更のお知らせ 10月25日(土)→11月8日(土)に変更させていただきます。ご了承願います。

○村民ギャラリー「三品優油彩画展」 会期:7月19日(土)～8月31日(日)、10時～16時、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。

いわかがみ 第百壱号
発行日 令和七年六月
編集発行 せきかわ歴史とみちの館
tel0254-64-1288 Fax0254-64-0300